

〔その時イエスはニコデモに言われた。〕「モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである。その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。御子を信じる者は裁かれない。信じない者は既に裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである。光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので光よりも闇の方を好んだ。-中略- しかし、真理を行う者は光の方に来る。」 -ヨハネ3章-

十字架を仰ぐ

荒れ野で、神とモーセに逆らった民は、神が放った「炎の蛇」によって多くが命を落としました。四旬節の原型である過酷な荒れ野の40年を経てその後、約束の地カナンに入植した民は、同じ轍を踏み、今度は飢えの苦しみからではなく、豊かさに驕って神を捨て、国を滅ぼした民でした。

わたしたちはこの民の歴史を、遠い国の他人事と済ますのではなく、世界の現状は今、私たち自身、同じ轍を踏んでいると気づく必要があります。

かつては、モーセの祈りによって神は、この禍を逃れる手立てに「竿に掲げた蛇」を仰ぐよう命じて民を救いましたが、バビロン捕囚から帰還した民の救い主としてイエスは、ご自身をこの「竿に掲げられた蛇」に譬えました。それは、この厭うべき「蛇を仰ぐ」ことで得る、救いの神秘を私たちに示すためでしたが、荒れ野を厭う私たちは、十字架にかけられたイエスをも厭います。

十字架は苦みのシンボルだからです。しかし、私たちの厭う苦みが、神を離れた自己愛から生じる罪の結果であるならば、私たちが本当に厭うべきは、苦みではなく「罪」なのです。十字架とは、拘束された体を捨てて、心で神に向かう道です。そして、十字架を仰ぐとは、厭うべき罪を認め、罪の結果である「死」を身に受けることに他なりません。

救いは自我を土台にした何か偉業を成し遂げることにあるのではなく、神からの恵みであり、私たちの洗礼は、罪に死んで新しい命に生まれ変わらせていただいた恵みなのです。

人類の生きるべき模範となるために世に来られたイエスは、人間として私たちの罪を背負うために、今、十字架に向かうことで、洗礼を完成(=復活)されるのです。イエスの変容を祝った私たちは、この四旬節中に、自分の十字架を担う勇気を「許しの秘跡」と「ご聖体」から戴きましょう。

ユダヤ人はしるしを求め、ギリシャ人は知恵を探しますが、洗礼を受けた私たちは、世に流されず、イエスの十字架をこそ、のべ伝える愛の人となるために。

